

波と風

理 念

思いやりのある
やさしい誠実な医療を
提供します

基本方針

1. わかりやすい説明による安心・安全な医療を提供します
2. 最新の知識と技術による質の高い医療を提供します
3. 地域医療機関との連携を強化し、地域社会の発展に貢献します
4. 高度な専門性をもつ医療人の育成に努めます
5. 医療資源を適正に活用し、健全な経営を実践します

CONTENTS

- 2P 新年度を迎えて
- 3～5P 就任挨拶
- 6P 産科・婦人科紹介
- 7P 職場紹介 9A病棟
- 8P リハビリテーション科
- 9P 化学療法センター移転工事の完了について
- 10P 令和6年度 第43回院内研究発表会
- 11P 第16回 院内QC活動口演発表会
- 12P 第12回 令和6年度クリニカルパス大会
- 13P 第15回 治験責任医師表彰
- 14P 第60回 卒業式を終えて
- 15P 第63回 入学式を終えて
- 16P 医療機器安全ニュース
- 17P うちの部署の接遇キラリさん
- 18P 連携医療機関紹介（呉市医師会病院）
- 19P 我が家のスターたち
- 20P 「令和6年度 呉医療センター特定行為研修」修了式の開催について
寄付について、編集後記



新年度を迎えて

呉医療センター・中国がんセンター 院長 繁田 正信

今年も季節は巡り、新年度を迎えました。思い起こせば、昨年度の冬は猛烈な寒波と共にインフルエンザが大流行しました。このところ、新型コロナウイルス感染症の影響で、マスク装着などの感染防止策が徹底されていたため、外出、外食の頻度が減少していたのですが、令和5年5月に新型コロナウイルス感染症が2類相当から5類に移行したことを受け、徐々にコロナ前の生活に戻り、令和6年冬は忘年会や帰省、旅行等、人々の交流も元通りになり、ようやくいつもの年末年始を迎えられる、と思った矢先の出来事でした。ここ数年、なりを潜めていたインフルエンザが猛威を振るったのです。数年間、インフルエンザに罹患せず、人々の免疫が低下していた事が原因の一つと考えられておりますが、それにしても激しいものでした。救急外来に受診される患者さんや入院中の患者さん、病院職員にも感染は広がり、しかも高齢者が多い呉地域では重症化や、インフルエンザにより低下した体力が、元に戻らず、入院が長期化するため病床が一杯になり、後方支援病院に転院させたくても、その後方支援病院にもインフルエンザが蔓延し、受け入れる事ができない、という負の連鎖が生じました。そのため救急搬送される患者さんを受け入れたくても空床がないため、お断りする時期もありました。新型コロナウイルス感染症、インフルエンザ共に風邪の一種です。昔から、風邪は万病の元、と言われておりますが、改めてこの言葉の意味を再認識させられました。今年度の冬はどうなるのでしょうか。少子高齢化、医療費削減の錦の御旗の元、急性期病床の削減が国策として進行しています。確かに平時では急性期病床は少々過剰気味かも知れません。しかし、昨年度の冬のような、季節性の感染症が大流行したり、新型コロナウイルス感染症の様な新たな感染症が大流行する有事の際、たちまち

病床が不足します。しかも一度機能を縮小させると、急には機能拡張出来ません。人材育成には時間がかかるのです。新型コロナウイルス流行の前、公務員が多すぎる、税金の無駄、などと言われ、役所や保健所の職員数が削減されました。その結果、いざ新型コロナウイルス感染症が流行した際、人手不足のため、事務手続き等、機能が麻痺した事は記憶に新しいと思います。近年、平時の余剰は無駄、としばしばマスコミで報道されていますが、無駄ではなく余裕、と解釈して、多少の余剰を持たせることが必要なのではないでしょうか。実際、今年度、あるいは来年度、いつ爆発的な感染症が流行するか分からないのですから。

桜の花は既に役目を終え、ツツジが旬を迎える季節となりました。今頃、音戸の瀬戸公園のツツジが見頃を迎えていると思います。今は1年で最も快適な季節です。たまには屋外に出て、野山を散策などいかがでしょうか。私が子供の頃は、両親に連れられて、家族で花見やハイキング、潮干狩りなど、自然と戯れる機会が多くありました。家の庭にも、小さいながら季節ごとの花や紅葉など、至る所にあり、自然と、季節と共存していたと思います。古来、日本人は四季を身近で感じ、共に生きていく人種だったと思います。しかし近年、科学の発達と共に、生活はどんどん便利になり、その一方で自然とはどんどん離れて行っている様に感じます。人間も野生動物の一種です。たまには自然と戯れて、大自然のエネルギーを体内に取り入れてみてはいかがでしょうか。きっと病に打ち勝つ程の活力がみなぎってくると思いますよ。



就任挨拶

地域医療連携部長（内視鏡内科科長） 吉田 成人

この度、令和7年4月1日より地域医療連携部長を拝命致しました吉田成人と申します。どうぞよろしくお願い致します。出身は広島市で平成4年に広島大学を卒業し、その後広島大学病院、広島赤十字・原爆病院、広島市立安佐市民病院、JR広島病院など多くの病院での勤務を経験してまいりました。令和6年4月に医療技術センター部長・内視鏡内科科長として当院に赴任後は多くの呉医療圏の施設を訪問させていただき、当院は各連携医療機関により支えられていると深く認識致しました。この度は重責を拝命し身の引き締まる思いです。

地域医療連携とは、医療機関同士が連携して、患者さんが適切な医療を受けられるようにする仕組みです。呉医療圏では急性期病院とかかりつけ医が連携して、患者さんへの長期間ケアを行っていますが、呉医療センターは三次救命救急センター、中国がんセンターに指定されており、急性期医療を中心とした高度先進医療を行う施設となっております。また再発を予防する慢性期医療は

かかりつけ医が担っています。患者さんが急性期から回復期を経て自宅に戻るまで、スムーズに切れ目のない医療を受けるため当院では地域医療連携室がその窓口として機能しています。地域医療連携室ではその他、診療の予約、CTやMRI検査などの高度医療機器を使った画像診断の予約、PET-CT検査の予約なども行っております。また「入退院支援センター」では、円滑な入院生活と患者さん・ご家族の意向に沿った退院後の療養生活ができるように、入退院支援を行っています。地域医療連携室にはソーシャルワーカーが在籍し、退院後の生活や社会復帰、医療費の支払い、患者さんやご家族の病気への不安など、病気に関連した様々な生活上の問題について医療福祉相談もお受けしていますのでご相談ください。

微力ではありますが呉地域の医療の充実に少しでも貢献できればと考えておりますので、今後ともよろしくお願い致します。



就任挨拶

医療技術研修センター部長（外科医長） 尾上 隆司

このたび、令和7年4月1日付で呉医療センター医療技術センター部長に就任いたしました尾上隆司と申します。私は平成8年に広島大学を卒業後、広島大学病院、JR鉄道病院、尾道総合病院で臨床研修を行い、広島大学消化器・移植外科にて学位を取得しました。2005年からの4年間は、米国マサチューセッツ総合病院／ハーバード大学にてリサーチフェローとして移植免疫学研究に従事し、帰国後は広島大学病院で肝移植や肝胆外科を中心に臨床経験を積み重ねてまいりました。2012年より研究室長として呉医療センターに赴任し、2015年からは外科医長として、腹腔鏡やロボット支援手術を用いた肝胆領域の低侵襲手術に力を注いでおります。私は広島市出身ですが、母方の本籍地は呉市警固屋であり当院に赴任したのなにか縁のようなものを感じます。

当院の医療技術研修センターには、BLS・ALSやエコーガイド下中心静脈穿刺などのシミュレーショントレーニ

ングが可能な高性能の機器が整備されており、医師のみならず看護師、臨床工学技士、薬剤師、救急救命士など多職種の実技研修に活用されています。これらの機器を活用した研修は、医療安全と質の向上に直結する重要な取り組みと考えております。

これまで新型コロナウイルス感染症の影響により、集合型研修や体験型トレーニングの機会が制限されてきましたが、流行が一段落した今、改めて研修センター本来の機能を再活性化し、地域医療従事者をはじめとした皆さまに広くご利用いただける、開かれた場づくりを目指してまいります。

微力ではございますが、これまでの経験を活かし、繁田院長のもと、呉地区の地域医療の質の向上と次世代医療人の育成に少しでも貢献できるよう努めてまいります。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。



就任挨拶

中央診断センター部長（血液内科科長） 伊藤 琢生

令和7年4月1日より中央診断センター部長を拝命いたしました血液内科の伊藤です。

2010年に当院に就任し、16年目となります。私は血液内科医のため、以前より末梢血や骨髓検体、病理検体などの診断では常日頃から検査部門の方々には大変お世話になっています。また自ら顕微鏡を覗く機会も多いため、検査部にはほぼ毎日足を運びますし、また当然かもしれませんが、輸血製剤使用数も院内の大部分が血液内科での使用であり、輸血部の方とも毎日のようにコミュニケーションをとらせていただいています。そのため、検査部の方々とは顔なじみの存在だと勝手に自負しており、この度このような職を与えられたのも何かの縁を感じています。「中央診断センター」は、どこか漠然としてイメージがわきにくい名称のため簡単に紹介させていただきます。

中央診断センターは、「臨床検査科」、「病理診断科」、「感染症科」の3部門から構成されています。

臨床検査科では採血や検尿などの検体検査、細菌やウイルスなどの感染症の検査、生理機能検査、輸血業務など多岐にわたる検査業務全般を担っています。生化学検査や血液検査は一日当たり700～800人分の検査を行っています。緊急の項目は24時間体制で検査を実施し、検査結果を迅速に報告しています。また、近年ではがん

ゲノム医療の進歩に伴い、遺伝子パネル検査など最先端の検査に対応しています。

病理診断科では、悪性腫瘍の診断や変性疾患の診断など、臨床の現場で治療方針を決める上で欠かすことのできない「診断」というステップの根幹を担っています。近年は発がんにおける分子学的メカニズムが明らかにされつつあり、各種分子標的治療薬や免疫チェックポイント阻害剤など、がん治療において分子学的な診断が欠かせない時代となっています。最先端の検査を取り入れて診断業務を行っています。また、オートプシーボードを定期開催し、がん診断の知見を深め、新人の研修を行っています。

感染症科では、院内の感染症の患者さんの動向や治療方針の助言、感染対策など、院内の感染症を制御（コントロール）する業務を担っています。

上記のように中央診断センターでは臨床業務に欠かさない「検査」、「診断」という、いわば医師にとっての「右腕」となる存在です。多くのスタッフが我々医師の毎日の診療を支えてくれています。検査部門と臨床の現場のコミュニケーションがより円滑となり、検査部門と臨床の現場双方のスタッフにとって、より快適に仕事ができるような環境が作れるよう努力したいと思っています。微力ではございますが、皆様のご協力を得ながら精一杯務めさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。



就任挨拶

消化器内科科長 高木 慎太郎

広島赤十字・原爆病院から参りました高木と申します。愛媛大学（野球部）出身で、広島大学附属病院の内科ローテーションで研修し、広島三菱病院、虎ノ門病院で後期研修を行い、広大に帰学。大学院を卒業後、前任地を経て当院に赴任いたしました。

私の専門は、消化器で特に肝臓です。ウイルス性肝炎は制御できる時代になりましたが、脂肪肝（SLD）（脂肪肝はSLDに名称が変更になっておりますが、そのお話はまたの機会に）肝硬変、肝臓の患者さんは依然として多く社会的な脅威となっております。これまで培ってきた技

術や知識を活かし呉の肝臓を守りたいと思います。

話は変わりますが、実は、私は生まれも育ちも呉であります。今はなき二河小・中（現：呉中央）の卒業です。ちなみに高校は修道高校で、呉線で通学していましたが、今は逆向きの通勤です。当院には幼い頃より家族がお世話になり何度も訪れていました。当時、先生方をはじめ、スタッフの皆さまには大変お世話になり、特に看護師の皆さまには患者の父のみならず付き添いの母にも親身になって寄り添っていただきました。今でも家族皆が「国立で看てもらってよかった！」と心から感謝しております。

今度は私がスタッフ側になります。恩返しではありませんが、患者さんやその家族が安心して医療が受けられるように心がけていきたいと思っています。消化器疾患、特に肝疾患は多くの合併症があり難治な患者さんが少なくありません。さまざまな問題が生じるため、あらゆる部署



就任挨拶

精神科科長 大盛 航

令和7年4月1日をもちまして、呉医療センター精神科科長を拝任致しました大盛航と申します。この場をお借りしてご挨拶を申し上げます。

わたくしは呉市出身で広島大学卒です。年齢は今年で50歳になりますが、医師としては遅咲きの17年目になります。

経歴と致しましては、2年間の初期研修を広島西医療センターで行い、以後は精神科医として広島大学病院で3ヶ月間、呉医療センターで9年9ヶ月間、そして広島大学病院で4年間勤務して参りました。気分障害、統合失調症、神経症、コンサルテーションリエゾン精神医学、ニューロモデュレーションを得意分野としております。呉医療センター在籍中に社会人大学院生として緩和ケアチーム専従の精神科医として勤務しながら精神疾患にお

の方々の助けが必要になります。皆さまのお力をお借りし共に頑張っ解決してまいりたいと思いますので、どうぞお気軽にお声掛けください。それでは、よろしくお願いいたします。

ける血液・脳脊髄液中のバイオマーカーに関する臨床的研究を行い、博士号を取得することができました。広島大学病院では外来医長とリエゾン医長を拝任し、後進の指導をして参りました。呉医療センターへは4年ぶりに戻って参りましたが、精神科医としての基礎は呉医療センターで学ばせていただいたと言っても過言ではありません。

これまで多くの方々の助けを借りて、現在の自分があると思っております。これからは、わたくし自身が後進の育成の一助となれるよう頑張ります。

呉医療センター精神科は薬物療法のみならず、電気けいれん療法や精神療法にも長け、多機能で充実しています。呉地域の精神科医療に貢献できるよう精進して参ります。皆様、どうか宜しくお願い致します。



就任挨拶

副看護部長 村川 紀雄

この度、令和7年4月1日付で岩国医療センターから異動してまいりました副看護部長の村川と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

出身は山口県の岩国市です。看護学校は国立療養所柳井医療センター附属看護学校を卒業し、国立岩国病院（現岩国医療センター）に入職しました。岩国医療センターでは、救急病棟、ICUで15年勤務し、その後看護師長に昇任して、米子医療センター、岩国医療センターで勤務をいたしました。この度、中国・四国グループの中で一番規模の大きな呉医療センターに副看護部長としての異動となり、不安の中で4月を迎えましたが、勤務初日から、皆さんに温かい声をかけていただき、呉医療センターの雰囲気の良いを感じるとともに不安な気持ちも和らぎ

ました。1日も早く副看護部長としての役割を果たすことが出来るよう頑張っていきたいと思っています。また、休みの日には大和ミュージアムや海上自衛隊の基地に行く等、久しぶりの単身赴任生活や、呉の街を楽しみたいとも思っています。

病院の理念である「思いやりのあるやさしい誠実な医療を提供します」、看護部の理念である「専門性をいかしたやさしさのある看護」を目指し、呉市民の皆様に呉医療センターで医療・看護を受けて良かったと思っていただけるよう努力してまいります。まだまだ力不足で皆様にご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

産科・婦人科紹介

産科・婦人科科長 熊谷 正俊



<産科>

当院は地域周産期母子医療センターに指定されており、24 時間体制で母体搬送を受け入れ、妊娠 30 週以降の分娩に対応しております。地域の開業医の先生方から切迫早産、多胎妊娠、前置胎盤、妊娠高血圧症候群などのハイリスク妊娠や、精神疾患、心疾患、腎疾患、糖尿病、血液疾患などを合併した妊婦の方を早期にご紹介いただき、総合病院であるメリットをいかした適切な管理を行うことにより、呉圏域の安全な妊娠、分娩管理を担っております。また子宮内胎児発育遅延や胎児奇形、胎児機能不全など児の状態を出生前に評価し、分娩時期や分娩方法の検討を行い、新生児医療へスムーズに移行できるよう心がけております。そして、産科臨床の中で最も急を要する場面に備えて、超緊急帝王切開や大量出血時のシミュレーションを定期的に行っています。

また当院は NIPT（無侵襲的出生前遺伝学的検査）連携施設に認定されており、遺伝医学関連学会の「遺伝学的検査に関するガイドライン」に基づき、羊水検査、クアトロ検査、NIPT を実施しております。遺伝子や染色体に関連した病気について、疑問や不安をお持ちの方を対象として、詳しい情報や専門的な遺伝カウンセリングの提供も行っております。



スタッフ

<婦人科>

婦人科領域の良性疾患、悪性疾患全てを治療対象にしています。がんセンターとして恥ずかしくないよう、子宮頸がん、子宮体がん、卵巣がん、卵管がん、腹膜がん、腔がん、外陰がんなどの悪性疾患の診療にはとくに力を入れています。日本臨床細胞学会の細胞診専門医および日本婦人科腫瘍学会婦人科腫瘍専門医・指導医の資格を持つ医師 2 名が指導し全スタッフでがん診療を行っています。

がん手術では従来の開腹手術に加え、令和 6 年度から再発低リスクと推定される子宮体がんと子宮頸がん I A1 期に対する腹腔鏡下手術を開始しました。また子宮体がんに対してはロボット支援下手術も導入予定であり、その前段階として子宮筋腫など良性子宮疾患に対するロボット支援下手術も開始しております。また、これまで試験開腹に終わっていたような進行卵巣がんや腹膜がんに対しては審査腹腔鏡および組織生検を行うことにより早期に術前化学療法を行ってから根治手術を行うなど、がん治療においても低侵襲な手法を積極的に取り入れています。

遺伝外来では HBOC（遺伝性乳がん卵巣がん症候群）、リンチ症候群などの婦人科疾患に関連する遺伝性腫瘍や遺伝性疾患についての相談に対応しております。HBOC の原因である BRCA 遺伝学的検査の施設要件を満たしており、一定の条件の患者さんを対象に保険診療を行っております。乳がんを発症し BRCA 遺伝子変異を認める方に対しては遺伝カウンセリングを行い、卵巣がん発症予防のためリスク低減卵管卵巣切除術とサーベイランスを行っております。

呉圏域の産科医療、婦人科医療をすべて当院にお任せいただけますよう、産婦人科一同精進して参りますので、今後ともよろしくお願いいたします。

職場紹介 9A 病棟

看護師長 流田 美佐



9A 病棟は、呉市および広島県南部で唯一の総合病院の中にある精神科です。主に統合失調症、気分障害、統合失調症、神経症、児童・思春期疾患、摂食障害等の診断と治療を行っています。また、精神疾患を有する身体合併症（新生物、内分泌・代謝疾患、神経系の疾患、消化器系の疾患、筋骨格系および結合組織、腎尿路生殖器系の疾患、中毒等）の患者さんを受け入れ、全人的ケアを行っています。

当科で勤務する看護師は、目には見えない患者さんの心の痛みや辛さを素早くキャッチしていく専門的な知識と技術に加え、身体疾患に対する十分なアセスメント能力も重要となるため、適切な対応ができるよう日々研鑽をしています。また、週に一度、精神科医師、各診療科の医師、看護師、専門チーム、専従の薬剤師や作業療法士、ソーシャルワーカーなど多職種でカンファレンスを開催し、患者さんの状態や今後の方針について話し合っています。



(写真 1 合同カンファレンスの様子)

9A 病棟では、明るい笑顔と確かな専門性をもって、患者さんへ最善の医療が提供できるよう努めています。



(写真 5)

【治療について】

難治性統合失調症に対する電気痙攣療法やクロザピンによる薬物療法を行っており、統合失調症の広島県の拠点病院に指定されています。広島県でクロザピンが使用できる総合病院の精神科は当科のみです。

また、リハビリでは専従の作業療法士が病棟に配属されており、患者さんの個別性にあったリハビリを実施しています。



(写真 2・3 作業療法の様子)

【レクリエーションについて】

気分転換活動を目的としたレクリエーションを看護師が企画し、年に 4 回の恒例行事として開催しています。レクリエーションの当日は、患者さんもスタッフも一緒に楽しい時間を共有しています。



(写真 4 レクリエーション クリスマス会の様子)



リハビリテーション科

作業療法士長 山本 弥生 ・ 理学療法士長 日浦 雅則



<診療概要>

リハビリテーション科では、疾病や外傷により心身に障害が生じた患者さんに対して、自宅・社会への早期復帰を目標に医師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士共同で総合的かつ包括的なリハビリテーションを提供しています。

特に、急性期リハビリテーションを強化しており、十分なリスク管理のもと、発症または手術直後からベッドサイド(病室)でリハビリテーションを開始し、運動機能や言語機能、摂食機能などの早期改善および合併症予防に取り組んでいます。

<特色>

◎疾患別チーム制

疾患別にリハビリテーションチーム(脳血管疾患、運動器疾患、心大血管疾患、呼吸器疾患、がん、精神疾患)を形成し、より高度で専門的なリハビリテーションが提供できる体制をとっています。チーム制を採用することにより、該当診療科の医師や看護師、その他の関連スタッフとの連携を深め、チーム医療の推進を促しています。

◎365日診療体制

発症・術直後の急性期リハビリテーションの早期介入および実施率を向上させるために、土・日曜日および祝日にも診療体制を整えています。

◎多職種連携

リハビリテーションはチーム医療であることが前提とされ、多職種連携の重要性が特に高まっている部門です。当科においても多職種が参加する定期的なカンファレンスや随時開催のケースカンファレンス、またはリハビリテーション実施計画書の多職種協同作成などを通して、関連スタッフと治療方針の確認や情報の共有を図っています。

その他、チーム医療への参画として栄養サポートチーム(NST)に言語聴覚士、呼吸器ケアチーム(RCT)に理学療法士、認知症ケア委員会に作業療法士、摂食カンファレンスに言語聴覚士がそれぞれ参加し、専門性を活かした情報を発信しています。



写真1. バイオテックスを用いた筋力測定



写真3. DSを用いた運転能力評価

<スタッフ>

医師3名(非常勤1名)、理学療法士21名、作業療法士14名、言語聴覚士6名、事務助手1名、合計45名。

<部門紹介>

◎理学療法

運動器疾患(骨折、股・膝人工関節)、脳血管疾患(脳梗塞、神経筋疾患)、呼吸器疾患(肺炎、COPD、肺切除術後)、心大血管疾患(心筋梗塞、心不全)、がん(血液腫瘍、消化器癌)などを対象に幅広く診療にあたっています。急性期リハビリを推進しており、発症・術前/術後早期より介入し、ADLの早期改善および合併症予防に取り組んでいます。必要に応じてバイオデックスを用いた筋力測定(写真1)、心肺運動負荷試験(写真2)や6分間歩行試験を用いた体力評価などの評価・解析を実施し治療に活用しています。

◎作業療法

14名の作業療法士が在籍し、そのうち12名が身体障害領域、2名が精神障害領域に従事しています。作業療法部門の特徴は、発症後まもない重症の患者さんが多いこと、もうひとつは、緩和ケア病棟・精神科病棟もあるため、身体(身体障害領域)だけでなく心(精神障害領域)のケアを必要とされる方も多いことです。また退院後の生活を想定し必要な方にはドライビングシュミレーター(DS)を用いた運転能力評価(写真3)も行っています。

◎言語聴覚療法

脳血管疾患、がん、摂食嚥下障害などの患者さんを中心に言語聴覚療法・摂食機能療法等を実施しています。摂食嚥下障害に対して、耳鼻科・脳神経内科医師、薬剤師、管理栄養士、摂食嚥下認定看護師、言語聴覚士などからなる「摂食嚥下支援チーム」が形成され、嚥下内視鏡検査(写真4)や嚥下造影検査等による評価のもと、定期的に合同カンファレンスを行い、包括的な介入を継続して行っています。



写真2. 心肺運動負荷試験



写真4. 嚥下内視鏡検査

化学療法センター移転工事の完了について

企画課長 田中 光照



昨年6月24日より実施しておりました化学療法センターの移転工事が、本年3月19日に無事完了し、5月7日より新たな化学療法センターとして稼働を開始いたします。

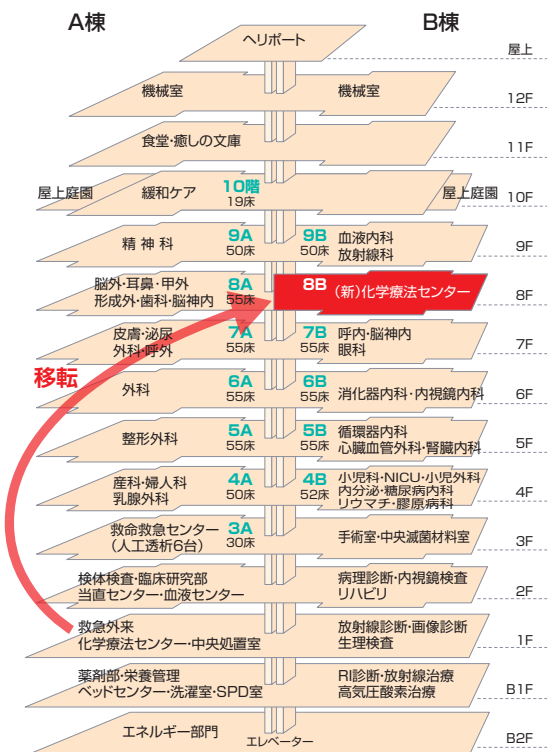
工事期間中においては、騒音、振動や断水・断湯による利用制限等により入院患者様並びにご家族の皆様にはご迷惑をおかけいたしました。皆様のご理解とご協力により、無事に工事を完了することができました。

今回の移転工事は、化学療法センターのベッド数確保や患者様の観察における安全面を考慮するなど機能面の充実を図るため、休棟していた病棟を改修して活用するためのものです。

工事に至るまでは、資材価格の高騰、又開発等の増加に伴う人手不足等による建築コストが高騰したこともあり入札が不調に終わり、当初の予定より約半年遅れのスタートとなりましたが、この度ようやく完成を迎えることが出来ました。

これにより、より快適で安全な医療サービスを提供できるようになります。

今後とも、ご支援のほどよろしくお願いいたします。



車いす優先トイレ

令和6年度 第43回院内研究発表会

臨床研究部長 讃岐 美智義



本年度の院内研究発表会は、令和7年2月1日（土）に開催されました。繁田院長による開会挨拶に続き、午前9時より発表が始まりました。

今回の発表演題は合計13題で、その内訳は症例報告6題、臨床研究3題、業務改善事例3題、特別講演1題でした（図1、2）特別講演では、副薬剤部長の坂本 靖之先生に「診療報酬改定を契機とした臨床研究への挑戦と学び」と題してご発表いただきました。

参加者は54名で、多職種が集まり終始和やかな雰囲気の中、活発な討論が行われました（図3）。

普段は交流の少ない職種間でも意見交換がなされ、当センターの臨床研究の質向上に繋がることが期待されます。

また、今回の成果を基に積極的に論文発表を進めていくことの重要性も再認識されました。

後日の幹部会議で優秀発表演題3題を選定し、管理診療会議において表彰式を行いました（図4）。

【優秀発表演題】

① 血管撮影装置更新に伴う被ばく線量の比較

○瀬井葉奈、逸見茉由、田盛雅英、三宅慎太郎、稲葉護、高木一成、二見智康（放射線科）

② 当院の嚥下内視鏡検査実施患者の摂食・嚥下Grが向上した例の評価

○安宅悠（リハビリテーション科）

③ 肺癌術後肺転移切除例の臨床病理学的特徴と原発性肺癌との鑑別

○田妻昌¹⁾、首藤毅¹⁾、橋本龍慶¹⁾、谷峰直樹¹⁾、尾上隆司¹⁾、三村剛史²⁾、田代裕尊³⁾
外科¹⁾、呼吸器外科²⁾、副院長³⁾

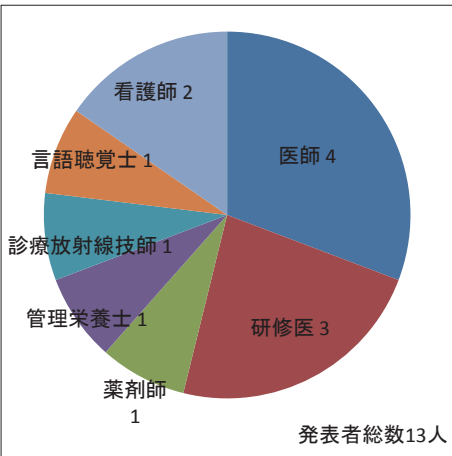


図1 発表者職種別人数

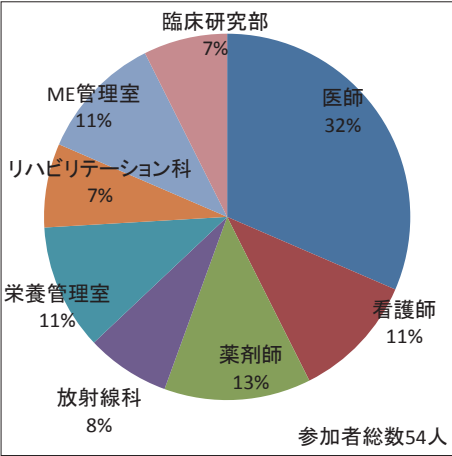


図2 参加者比率



図3 会場光景



図4 表彰光景

第16回 院内QC活動口演発表会

院内 QC 活動運営委員会 委員長
統括診療部長 立川 隆治



令和7年1月29日に院内 QC 活動口演発表会を開催し、64 名の方にご参加いただきました。

今年度は、院内 QC 活動に全9題のエントリーがあり、令和6年11月27日から令和6年12月9日でポスター掲示と、全職員を対象とした一次投票が行われました。発表会では、上記投票により決定した上位6題の口演発表が行われ、最終結果は次のとおりとなりました。

受賞区分	タイトル	部署
最優秀賞	電子カルテ修理の世界	医療情報部
優秀賞	できることからコツコツと～医薬品購入費削減を目指して～	薬剤部
3位	外来リストバンドの見直し	経営企画室
特別賞	ようこそ 4B へ！！～快適で安全な入院生活を～	4B 病棟
特別賞	STOP！コストシール貼り忘れ	手術室
特別賞	デジタルサイネージの活用～院内広報の充実化～	経営企画室



第12回 令和6年度クリニカルパス大会

クリニカルパス委員会 委員長 山崎 琢磨



令和7年3月7日にクリニカルパス大会を開催し、90名と多数の方にご参加いただきました。今年度のパス大会ではテーマを限定しませんでした。各病棟からアウトカム評価についての内容で全6題のエントリーがありました。令和7年1月31日から令和7年2月21日の間にポスター掲示と全職員を対象とした一次投票が行われました。クリニカルパス大会の当日では、上記投票により決定した上位3題の口演発表が行われ、二次投票の結果は以下の通りとなりました。

受賞区分	タイトル	部署
最優秀賞	不適切にもほどがある？ ～正しいアウトカム評価が6Aの課題～	6A病棟
優秀賞	パス評価正しくしなきゃだめですか？	4A病棟
敢闘賞	根付かせようクリニカルパスの輪 ～全副鼻腔手術パスを使用した成果と課題を通して～	8A病棟

また、投票の集計時間には、「アウトカム評価について」と題して、クリニカルパス委員会5A病棟の岡野看護師から発表を行いました。

委員会では2年前より各病棟のアウトカム評価が正しく行えているか調査を行っています。クリニカルパス大会ではその成果を発表し、今後のさらなる課題を見出すことができました。



第15回 治験責任医師表彰

治験主任 矢野 圭悟



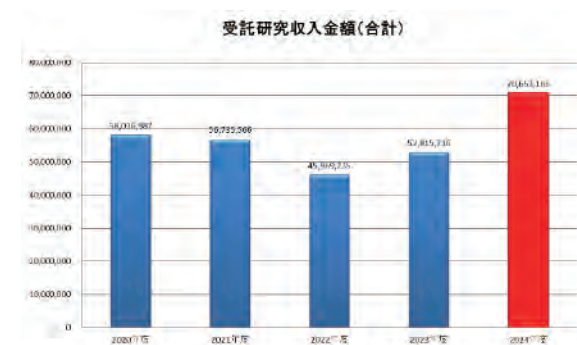
2025年3月の管理診療会議にて2024年度治験責任医師表彰が行われました。治験責任医師表彰は2010年度から開始され、1年間で最も治験に貢献された治験責任医師を表彰するものです。

2024年度は同意取得数および症例登録数で1位となった内分泌・糖尿病内科の久保田先生と請求金額で1位となった循環器内科の杉野先生が受賞されました。

当院では昨年度は14診療科で36試験（企業主導治験：35試験、医師主導治験：1試験）を実施し、多くの症例登録が行われたことから、直近5年間で最高の請求金額を記録しました。

治験は単なる臨床試験ではなく、既存の治療が無効な患者さんにとって新たな治療選択肢になる可能性を秘めています。治験管理室一同、この想いを胸に日々の業務に励んでおります。今後も多くの試験を受託し、医師や患者さんにより多くの治療の選択肢を提供できるよう努めてまいります。

治験の実施は治験管理室だけでなく医師や各部門のスタッフの皆様のご協力があってこそ成り立つものです。この場を借りて深く感謝を申し上げますとともに、今後も治験管理室の円滑な運営にご協力いただきますようお願い申し上げます。



第60回 卒業式を終えて

呉医療センター附属呉看護学校 教員 小杉 恭子



令和7年3月4日に来賓をお招きし、病院職員、学校職員、保護者の方、在校生参列のもと、第60回卒業式が挙行され、58名が卒業しました。当校の教育にご協力ご理解をいただいた関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

長かったコロナ禍を経て、60回生は入学後の3年間、制限が徐々に緩和される中で学校生活を送りました。このような中ではありましたが、授業や学内演習はもちろんのこと、ナイチンゲール生誕祭やスポーツ交流会、学校祭などの行事を経験でき、大きく成長することが出来ました。臨地実習ではご指導を頂きながら、受け持たせていただいた患者さんの看護を通して学びを深めることができました。また、60回生は2022年の厚生労働省の改正省令によるカリキュラム改正後、初年度の学年です。看護のニーズが病院だけでなく、在宅や施設など地域で高まる中、対象を地域で暮らす人々と広く捉えるという観点で看護を学んだ最初の卒業生となります。4月からそれぞれの道に進みますが、これからも感謝の気持ちを忘れずに、経験を積みながら活躍されることを心より願っています。



3年間の学校生活では看護師を目指すため、解剖生理学、病態生理学などの知識を学び、演習を経て、臨地実習で看護実践を行いました。学校行事では新型コロナウイルスの感染拡大に伴って多くの行事が規模の縮小や開催の断念を余儀なくされる中で、3年次の学校祭では外部から地域の方々をお迎えして開催ができ貴重な体験ができました。企画から運営にかけて個々の主体性を発揮することや学生間での連携の大切さを学びました。4月から新人看護師として呉医療センターの看護師として頑張っていきます。私は患者の個性に合わせた看護を実践できる看護師になりたいと考えています。ご指導いただきながら成長できるよう努力していきたいと思います。

60回生 藤原 蒔里

60回生は入学後は新型コロナの影響によりリモート授業がありましたが、学校行事では親睦会やナイチンゲール生誕祭を通して他学年と仲を深めることができました。また、スポーツ交流会や広島県看護学校研究発表会では、広島県内の看護学校の学生が集い、多くの学生が看護師を目指して頑張っていることを知り、お互いに看護になるための意欲を高めあう機会となりました。

また、60回生は新カリキュラムのもと、地域の方々が住み慣れたところで安心して生活できるような支援について考えることができました。そのことから臨床の実習でも患者の生活背景や自宅の環境を考えながら関わることができ、改めて看護の奥深さを実感しました。これからも感謝の気持ちを忘れず、より良い看護を実践できるように多くの経験を積んでいきたいです。

60回生 富山 愛心



第63回 入学式を終えて

呉医療センター附属呉看護学校 教員 小杉 恭子

令和7年4月8日に穏やかな陽気の中で37名の新入生をお迎えしました。花開いた看護学校前の桜も、入学生を待ちわび、まるで歓迎するかのように、かわいらしい花を例年より長く保ち式典をより華やかにしてくれました。

来賓、病院職員、学校職員、保護者や在校生に温かく見守られる中、37名の代表者が入学宣誓を行いました。宣誓のことばに新入生全員の心が一つになったと感じました。私も教員としての責任を再認識し、看護師になるための第一歩を踏み出す新入生たちと一緒に、心新たにスタートを切る気持ちになりました。

少子高齢化の中で、看護職を目指す人材は宝だと思います。新入生の全員が目標をもち、社会で活躍できるよう互いに切磋琢磨し、そして優しい心を育くんだ看護師となるよう支援していきたいと思います。皆様、講義や臨地実習、学校行事などの折々の機会でも、ご指導をよろしくお願い致します。



繁田学校長からの入学許可証授与



代表者の入学宣誓



在校生からのお祝いのことば



在校生が作成したウェルカムボード

入学宣誓した新入生にインタビュー

入学式で新入生代表として宣誓をさせていただきました。たくさんの人の前で宣誓の言葉を述べることはとても緊張しましたが、貴重な体験となりました。これまで支えてくれた家族に感謝しながら、これからの学びを大切に、立派な看護師を目指して頑張っていきたいです。

63回生 瀬戸 優芽花

17

連携医療機関 紹介

呉市医師会病院

院長 先本 秀人



呉市医師会病院院長の先本秀人です。私は呉市広町で生まれ育ち、広にある中国労災病院で20年勤務した後、2019年に呉市医師会病院に入職、2024年4月に院長に就任しました。当院は呉市医師会事務局・看護学校・総合福祉センター・臨床検査センターと共に休山トンネル付近、灰ヶ峰が良く見える朝日町に位置しています。1961年にハワイのクアキニ病院を参考に開設された、開業医（かかりつけ医）と病院が緊密に連携を取りながら患者さん中心の診療を行っている地域医療支援病院です。

当院は開放型病院で全病床を開放病床としており、当院医師が主治医になる以外に当院医師がサポートしながら開業医の先生が主治医になってご自分が診ている患者さんを入院させ、診療することができます。患者さんやご家族にとっては信頼関係のある先生に入院前から入院中、退院後までを通して診てもらえる安心感があるようです。その他、医療機器の共同利用も積極的に行っており、開業医の紹介で胃カメラ・大腸カメラ・CT・MRI検査など、検査のみの外来で当院を訪れる患者さんも多くおられます。

内科と外科の診療を中心に行っている病院ですが2010年に大腸・肛門外科を開設してからは、大腸肛門疾患の患者さんが増え、県内でも名前が知られるように

なりました。2014年7月に大腸肛門病センターを開設、痔や大腸癌の外科的治療だけでなく便秘や便もれなどの排便機能障害の検査や治療、ストーマ（人工肛門）外来、専門看護師によるおしりの悩み無料相談などを行っており、市外や県外からも来られる患者さんも多くおられます。また、2018年に藤森正彦医師を代表に、多職種からなる排便ケアチームPOOP（プープ）を結成、児童会や小学校、老人会などで出前講座を行い、排便の大切さや排便ケアに関する啓発活動にも力を入れています。

呉医療センターには多くの診療科があるため、当院の患者さんの専門的診療や急変時の対応などで大変お世話になっています。また、呉医療センターで高度急性期治療を終えた後、自宅へ帰るためのリハビリが必要な患者さんや施設入所まで経過観察が必要な患者さんを当院へ転入院していただくなど、地域包括ケアシステムに基づいた良好な病病連携が行えていると思います。今後も地域の患者さんのため、尽力して参りますのでよろしくお願いいたします。



CT装置



排便ケアチームPOOP

地域医療支援病院

呉市医師会病院

〒737-0056 広島県呉市朝日町15-24

院長 先本 秀人



病院外観

我が家の「スターたち」

保護者コメント

家では自分の思いやこだわりが強く、よく怒ったり姉と喧嘩していますが保育園では穏やかに友達と過ごしていると聞いていつも安心しています。

先生方の優しい声かけや関わりのおかげだと思います。家では経験させてあげられないようなことをたくさんさせていただき、感謝しかありません。

休みの日も「保育園行く！」とよく言っており、本当に楽しく過ごせているのと感じます。単語しか話せなかった入園時と比べ、色々と話せるようになり家でも園で歌った歌をたくさん聞かせてくれます。

これからもお友達と色んな経験をして成長して欲しいです。

田回 椿ちゃん



担任保育士のコメント

毎日元気いっぱいのつばきちゃん♡先生たちの名前を覚えてくれて、毎朝「〇〇せんせいおはよう！」と言ってくれるので、先生たちはすごく元気が湧いてきます。

給食をはじめは苦手なものもあったけど、今はなんでもパクパク食べて、食べ終わるのが一番！「つーちゃんが一番だったよ！」とうれしそうな笑顔がすごくかわいいです。

これからも元気いっぱい楽しく遊ぼうね！

保護者コメント

入園して約1年半が経ちました。保育園でたくさんの経験をさせていただき、できることが日に日に増え、成長を感じる毎日です。

「今日は〇〇して遊んだんだ～」と園での出来事を教えてくれたり、園で歌っている歌を聞かせてくれたり、お友達とおしゃべりしている様子を見ると、本当に楽しく過ごせているんだと感じます。

3月で退園となり、大好きな先生方や友達とお別れするのはとても寂しいですが、すずらん園での楽しかった思い出を糧に新しい環境でもさっちゃんらしく元気に過ごしてほしいです。

寺岡 紗知香ちゃん



担任保育士のコメント

にこにこ笑顔のかわいいさちかちゃん。おはなが上手になり、「さっちゃん〇〇すきなんだー！」といろいろお話してくれるようになったね。

野菜も少しずつ食べられるようになり、「さっちゃんがじぶんで」と自分で食べられるようになったね！

もうすぐ、お姉さんになるさちかちゃん、どんなお姉さんになるのかなあーたのしみです♡

「令和6年度 呉医療センター特定行為研修」修了式の開催について

管理課庶務係 奥村 祐介



令和7年3月17日(月)に「令和6年度呉医療センター特定行為研修」修了式を行いました。院長や副院長、特定行為研修の責任者である救命救急センター部長をはじめとした9名の関係者及び受講生3名で執り行われました。

当院では令和3年度より「救急領域パッケージ」の研修を開講し、令和5年度からは「末梢留置型中心静脈注射用カテーテル管理」通称PICCを開講しております。令和6年度特定行為研修では「救急領域パッケージ」に2名、「PICC」に2名、計4名の看護師が当院で研修を受講されました。令和6年6月より研修は開始され、今年の3月までの約10カ月間、研修生の頑張りの結果、無事4名とも研修を修了することができました。

特定行為研修は近隣の他医療機関でも開講されておりますが、当院の症例数は非常に豊富で他施設での研修と比較して多くの症例数を学べると自負しております。今年度も特定行為研修の開講を予定しており、4名の看護師が受講予定となっております。

この度研修を修了した4名の看護師には所属病院に戻って現場で活躍いただくとともに、特定行為を行える看護師のモデルケースとして、特定行為研修を各方面に広めていただければと思います。今後も臨床現場で活躍できる特定行為研修の修了者を増やしていきます。



呉医療センターへご寄付をいただきました。

令和7年1～3月に、ご寄付をいただきました。

◆ご寄付 匿名3名（医療の充実のため）（呉医療センターの発展のため）（臨床研究と地域医療の発展のため）

みなさまからの気持ちのこもったご支援をありがとうございました。

編集後記

新年度に入り、当院もフレッシュな新採用職員が入職し昨年末まで新人だった職員も後輩が出来て顔つきが引き締まったように感じます。

という私もこの度担当交代となり、1年生ですが皆さまに情報がしっかり伝わるよう業務に努めていく所存です。本年度もどうぞよろしくお願いいたします。（広報委員）